



★2020年10月～12月の予定★

【事務所関係者の動き】

アンマン勤務

(JICAヨルダン事務所内)

宮原 千絵 所長(ヨルダン事務所長兼務)

柳 竜也 次長(ヨルダン事務所次長兼務)

今村 誠 職員(ヨルダン事務所兼務)

成田 英幸 職員

高島 淳 企画調査員

宮越 麻衣子 企画調査員

高井 史代 企画調査員

【公休日】

10月 6日 October War
(十月戦争)

10月 29日 Prophet Muhammad's
Birthday
(預言者生誕祭)

12月 29日 年末休暇

12月 30日 年末休暇

12月 31日 年末休暇

「アハバール・カシオン」

～名前由来について～

「アハバール」とはNewsを意味するアラビア語。「カシオン」とはダマスカスの北に位置する旧約聖書にも記されている山の名前です。

◇アハバール・カシオンのバックナンバーは以下URLよりご覧いただけます。

<https://www.jica.go.jp/syria/office/others/newsletter.html>

●お知らせ

アハバール・カシオンは[JICAホームページ](#)からのみご覧いただけます。本ニュースレターは四半期に一度の発行です(原則4・7・10・1月を予定)。

●事務所から

2011年4月28日以降の関係者国外退避に伴い、JICAシリア事務所は現在JICAヨルダン事務所内に日本人所員執務所を設けています。

本号では、ヨルダンでのシリア難民支援を行ったJOCVの活動報告、レバノン・ベイルートにおける大規模爆発に関するレポート、国際ガールズ・デー(10月11日)にシリア事務所現地職員から共有された事務所開設当時の回想記事等を掲載しています。

●活動報告

シリア難民支援隊員(手工芸)、幼稚園にて活動

私が活動していたヨルダンのシリア難民キャンプには、たくさんの子供がいた。私の配属先であった幼稚園に通う子供たちはキャンプで生まれ、キャンプで育っている。施設の定員を上回るほどの子どもがいるため、日本の様に待機児童がいたりする。大きな瞳にクセのかかった髪の毛の子ども達は、まるで天使で、一生懸命話しかけてくれる。何を言っているのか全く理解できなかったけれど、私にとって彼らとの関りは癒しだった。

今まで幼児教育とは無縁だった私が、なぜ幼稚園での活動を始めたのか。それは壊れてるから直してくれと言われたミシンがきっかけだった。実際には壊れていたわけではなく、糸のかけ方が間違っており、職員が使い方を知らないだけだった。支援により機材や材料は充実しているものの、うまく使われていない状況を見てとてもやりきれない思いになった。しかしこの職員、ミシンの使い方は知らないものの、個々が工夫を凝らして教材を作成したり壁のデコレーションをしており、幼稚園をにぎやかに飾っていた。初めて見た時、私はアイデアや工夫に感心していた。靴ひもを結ぶ練習、絵合わせ、数を学ぶ教材など多くの物を手作りして、温かみを感じた。そこで私は、教材等を作る作業を共にする中で、職員がミ



職員による手作りの教材

シンの使い方や裁縫技術を上げるための活動を目指した。

最初は、職員が手作りに感心していたものの、一緒に作業を始めると小姑のように色々な部分が気になった。その中でも私が一番気になったことは、黒マジックの使用手法だ。顔を描いたり表現し難い部分を、マジックで仕上げてしまう。彼女たち全員が、当たり前

の手法として行っており、出来上がった物にとっても満足しているようで、私の美的感覚の方がおかしいのか？育ってきた文化の違いでこの国ではこの表現が美しいのか？？ある意味アートと言えるかも…現代アート？？と本気で翻弄されてしまうほどだった。しかし、私がマジックを使わず同じように作ると、違いを納得してくれたようで、自身の美的感覚をまだ信じていいかもと思った。

また、私が何か作る時は必ず型紙を作った。型紙を使うという感覚は、彼女



職員制作のパペット
黒マジック使用(左から2番目)

達にはなく、生地に直接ペンで形を描くか、いきなり裁断してしまうという一発勝負の潔さがあった。細かいことは気にしないのだ。そんな彼女達からしたら、いちいち紙で型紙を作るなんて手間と材料代がかかるなあ～という感じであろうが、型紙を使うという方法も知って欲しかったのと、今後、同じものを再度作れるようにと思い、毎回型紙からの製作を行った。

ミシンの使い方、縫いの基礎、型紙を使う方法、黒マジックに頼りすぎない事、天使達が遊んだり泣いたりしているのを眺めること、左右の頬を合わせて挨拶をすること、朝ご飯を皆で食べること、それぞれの文化の違いについて女子トークで盛り上がる事、音楽が流れたら皆で踊る事、これが私の活動だった。コロナの影響で、活動期間満了まで半年を残して緊急帰国となり、「また来週ね～」といつものようにキャンプを後にしたままの皆との「来週」はいつ来るのか…また頬を合わせて挨拶し、ホンモスやオリーブ、ファラーフェル、ジュブネを



型紙を使用した見本

ホブズと食べながら、女子トークに花を咲かせ、アラブミュージックに乗せてダンスをできる日が、またいつか訪れてくれることを願っている。(篠原 亜希子 2018年度2次隊[手工芸])

●レポート

レバノン・ベイルートにおける大規模爆発



爆発直後にベイルート市内でけがをした女の子を運ぶ男性 © Ritzau Scanpix
出典:UNHCR Lebanon
<https://www.unhcr.org/lb/13297-unhcr-supporting-lebanons-relief-and-recovery-efforts-following-the-devastating-beirut-explosion.html>

2020年8月4日、レバノンの首都ベイルートに位置する国内最大の港で大規模な爆発が発生しました。被害は、爆発の中心地点から半径5km以上にわたっており、8月30日時点での当局発表¹によると、爆発による死者は190人、負傷者は約6,500人に上り、5万棟以上の家屋が被害を受け、約30万人が住む場所を失ったと見られています。公共施設で

は、9つの主要な病院、および49の保健所が被害を受け、うち病院1つと保健所8つは機能不全となりました。学校は、公立・私立合わせて178校が被害を受け、70の歴史的建造物が緊急の補修を必要としています。その他にも甚大な被害が報告されており、物理的な被害総額は約38～46億米ドル(約4000億～4830億円)と推定されています(世銀²)。

JICAは、国際緊急援助隊事務局を通し、爆発から6日後の8月10日に、レバノン政府に緊急援助物資(テント・毛布・プラスチックシート・スリーピングパット・ポリタンク・浄水器)を供与しました。³

シリア事務所では、今回の爆発で多大な被害を受けた、レバノン国内の医療分野への支援を行うべく、過去にJICAの本邦研修に参加した帰国研修員の方々と協力しながら、具体的な支援策の検討を重ねています。(成田)

¹ Presidency of the Council of Ministers, *Beirut Port Disaster Situation Report*(30 August 2020) [http://drm.pcm.gov.lb/Media/News/Beirut-Port-Disaster-weekly-report-PM-30-Aug-2-\(1\)](http://drm.pcm.gov.lb/Media/News/Beirut-Port-Disaster-weekly-report-PM-30-Aug-2-(1))

² The World Bank, *Beirut Rapid Damage*



爆発によるガレキや粉塵の撤去後、自主的に市内の清掃作業を行う若者たち
出典:WHO Lebanon

<http://www.emro.who.int/lbn/information-resources/without-relying-on-any-official-assistance-people-are-lending-each-other-a-helping-hand-to-move-on-from-the-first-impact-of-the-beirut-blast.html>

and Needs Assessment (RDNA) - August 2020 <https://www.worldbank.org/en/country/lebanon/publication/beirut-rapid-damage-and-needs-assessment-rdna---august-2020>

³ <https://www.jica.go.jp/information/jdrt/2020/200811.html>

シリア事務所と私の歩み

私は以前から、本誌上で様々な記事を執筆してきましたが、今回新たなテーマを考えている時、JICA事務所で働き始めたおよそ30年前の日々を思い出しました。当時は事務所の告知や活動を知らせる広報誌等が無かったため、その頃に光を当てたいと思います。

1990年にさかのぼりましょう。当時の私は、経験と知識および責任のある仕事を求めて入社した若い女の子であり、この職場で真面目さ・プロ意識に代表さ



1995年当時のMarah職員

れるような日本人のワーク・スピリットを体感できることに興奮していました。

当時のJICA事務所は、開設から5年も経っておらず、日本人職員2人と現地職員1人が働いていたため、私が4人目の職員となりました。私にとって日本語が飛び交う職場は初めてであり、最初は事務所内での職員や若いボランティアの雰囲気には驚きました。また、スタッフみなが団結心と連携に重きを置いて働くことに加えて、日本人職員が低い声で話し、静かに仕事をしていることで生まれる、職場の落ち着いた体制と空気に魅了されました。

当時の私は、主に日本人ボランティア

の活動支援を担当していました。私の役割は、彼らが配属されている組織とコミュニケーションを取り、ボランティアが直面するであろう問題を克服することによって、彼らの活動をよりスムーズにすることでした。私はいつもダマスカスと地方の間を往復し、ボランティアやそのカウンターパートと面会し、彼らのレポートの翻訳やカウンターパートとの意思疎通の促進、さらには住居探しの手伝いも行いました。

その後、シリア事務所は国内で様々な技術協力プロジェクトを立ち上げることとなり、研修事業において、管轄当局に連絡し、研修参加に適した候補者を選出してもらうこと、候補者の推薦書を受け取り、日本に派遣される前に彼らと面談することなどが私の主な職務となりました。

また、当時はこれらJICAの活動をまとめた資料がなかったため、私は1991年から事務所やボランティアの活動をまとめたかわら版の発行を開始しました。このかわら版は、アラビア語1ページで、アラビア語を学習していた日本人ボランティアに配布していました。その後案件が増えるにつれ職員数が増え、ニュースレターを発行するというアイデアが生まれ、手書きのかわら版から、カラーで印刷された4ページの月刊ニュースレターとなりました。当時の私は編集担当として、それぞれの分野で働く同僚から記事を集め、特にJICAがシリアで貢献している分野を重点的に特集していました。

時は流れ、シリアは戦争という最も過酷な経験をし、JICAのプロジェクトは強



1991年5月発行のアラビア語かわら版

制的に中断されました。しかし私は現在、私たちの事務所のニュースを知りたい、また私の国、その文化、そしてその慣習について教えてほしいと考えている読者となつがることのできる窓の1つとして、アハバル・カシオンの力を再認識しています。シリアという国が、より美しく、力強く立ち直り、現地でのニュースレター発行が再開される日が1日も早く来ることを、心から願っています。

(マハラ・モラッド シニア・プログラム・オフィサー)



エジプトで研修を受けるMarah職員(1995年)

◇マハラ職員も出演する国際ガールズ・デー特集動画は[JICA広報室Facebookページ](#)等からご視聴いただけます。

● 離任挨拶

マアッサラーム！お疲れ様でした！

青年海外協力隊員
氏名：篠原 亜希子

皆様こんにちは。私はCOVID-19の影響により3月中旬にヨルダンから帰国、8月の頭に当初の任期満了日より早く任期を終えることになりました。今までにない世界的な混乱の中、隊員としてヨルダンで当たり前のように活動できていたことがとても貴重で尊い時間であったことを強く感じた経験となりました。私は手工芸隊員として主に幼稚園での教材やお遊戯会で使用する衣装を現場職員に指導しながら共に制作しておりました。また、私の趣味として続けてきたダンスの経験を生かし、ユースセンターでは女の子達とストレッチやズンバをしながら共に汗を流しました。緊急帰国で皆と顔を見てお別れする事が出来なかった心残りではありますが、いつかまたヨルダン式の挨拶で皆と再会できると信じています。

マアッサラーメ！お疲れ様でした！

青年海外協力隊員
氏名：竹内 和彦

2018年度2次隊でヨルダンに派遣されておりました、竹内和彦です。現地ではシリア難民の子ども達のスポーツ支援に取り組みました。

着任時には「アラビア語の壁」「気性の激しい子ども達の壁」に圧倒されたものの、現地の方々の力を借りながら、最終的には施設対抗のラグビー対抗を開催できました。さながらスクールウォーズのような任期終盤となりましたが、やり遂げられたことに自信をつけた1年半となりました。

帰国後は縁あって、国内の難民支援活動に従事しています。様々な在住外国人の生活課題(教育・介護・在留資格など)に関わる活動は大変でもありますが、やりがいも感じます。国内のシリア難民などの方々との関わりを通じて、この分野の学びを深めていきたいです。



アラビア文字をモチーフにしたイスラム文化における伝統的な壁面装飾は通称「ロウハ」と呼ばれ、ヨーロッパなどにもコレクターがいる伝統工芸品です。象牙のような質感を持つラクダの骨や、真珠貝などを材料に使いますが、イスラム書道特有の複雑な形に加工する必要があるため、最近では職人の数も少なくなっているそうです。(成田)

◇象嵌・螺鈿職人：マクシーム・アブドゥルカリームさん

「私は伝統的な材質や技術を用いて、壁面彫刻や装飾品などを作成しています。幼少期に叔父から技術を教わり、約30年が経ちました。私の知る限り、伝統的な高品質のロウハを制作できるのは、現在では私を含め3人だけです。」

り組める一番の理由は、この仕事では創造性に対する制限や天井は一切なく、果てしなく続く空のように自由であるからです。

現在、他の多くの伝統工芸と共にこの技術を守り伝えるため、若者や女性に対して技術指導をしていきたいと考えています。ヨルダン国内でも様々な職業訓練を提供する組織がありますが、資金や売り上げの大半は組織側に流れてしまう例も見られます。しかし、実際の生産者の労力や品質が適切に評価され、それに見合った対価が得られるような仕組みにしなければなりません。」



ラクダの骨と真珠貝を使用した
ロウハ(壁面装飾)
(アブドゥルカリームさん作)



ラクダの骨を使用した置物
(アブドゥルカリームさん作)

シリアのダマスカス郊外ワディ・バラダ出身で、ヨルダンへは2014年6月に移ってきました。今年7月にヨルダンの首都アンマンで小さな工房を開きましたが、新型コロナウイルスの影響で仕事の依頼は多くありません。しかし、この技術を持つ職人は多くないため、今だからこそ、この技術を絶やしてはいけなと感じています。

私が情熱を持って工芸品の制作に取



ラクダの骨で指輪を制作する
アブドゥルカリームさん

◇アハバール・カシオンのバックナンバーは以下URLよりご覧いただけます。
<https://www.jica.go.jp/syria/office/others/newsletter.html>

ホームページ

www.jica.go.jp/syria/index.html

お問い合わせ先 (E-mail)

sr_oso_rep@jica.go.jp

お知らせ

アハバール・カシオンのバックナンバーは左記JICAホームページより閲覧いただけます。次号の発行は2021年1月の予定です。寄稿やお問い合わせはメールにて受け付けております。

編集後記

コロナ禍も半年以上が経過しましたが、未だに「新しい生活様式」には慣れないと感じています。シリア・レバノンともに以前に増して困難な状況が続いていますが、これ以上事態が悪化しないことを願いながら、寄付など個人でできる支援も行っていきたいと思っております。(成田)